談話室

ふるさと

ふるさとを離れて40年，この頃よく昔のことが思い出される。私の生まれた町は，埼玉県北足立郡吹上町（現埼玉県鴻巣市）。高崎線の上野と高崎の中間に位置する。当時，人口は6,000～7,000人，上野までは約１時間半。北隣は一の谷の戦いに平敦盛を討った熊谷直実の地の熊谷市，東隣は足袋の生産高日本一の行田市。吹上という名に相応しく田んぼを１～２ｍほど掘ると新鮮な湧水。だから豆腐屋が多かった。

春。一面に菜の花やレンゲ草。梅雨時の川は豊かでミズスマシやゲンゴロウがすいすい泳ぎまわる。田植え休み。農耕馬は背中に合羽をつけて田んぼを行ったり来たり。一日の仕事が終わると百姓は近くの川で馬の汚れた足をやさしく洗う。

夏。朝からセミの声。井戸の中のスイカを楽しみに「夏休みの友」。近くの元荒川への泳ぎ。道々のドドメ。六尺褌にあこがれ，なれない手つきで作る。出来栄えはまあまあ。が，水につかると褌は縮み，まったく役に立たない。

秋。黄金色一色。体育の時間はときどきイナゴとり。そのイナゴを佃煮にするために父兄に売り，教室のカーテンを買う。３日間の秋休み。高温と低音の繰り返しの足踏式脱穀機の心地よい音。

冬。暮れの商店街のくじ引き。買い物10円で１枚の引換券。長蛇の列。年末の28日か30日の偶数日にはあちこちで餅つき。年始めはコマ。新しい樫のコマにクレヨンで好みの色を塗る。コマは勢いよく廻っても目指した模様がでない。雪も降り，積もる。モチをつけて餌を求める小鳥を狙う。

町の中央には吹上小学校。教室は１クラス36人前後。二人机。時々の席替え。好きな子と並びなさい。不思議とうまくおさまる。壁に貼られた日本地図と世界地図。世界地図は，日本が真ん中，右手にアメリカ大陸，左に中国・ソ連邦，ヨーロッパは最も左に位置する遠い大陸。社会科の宿題は，白紙の日本地図に県名や山脈，平野や大きな川を記入し覚える。埼玉県を目立つピンクで飾る。関東平野を緑で大きく描き，利根川を悠々と黒で塗る。

昼飯の弁当は白米半分わり半分。好物はイカと海苔。干しイカを前日から灰

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。

水につけておく。いかが生き返る。海苔は上面と真ん中の二段作り。なんと贅沢な！ 隣のＹ君が隠しがちに弁当を開く。ほとんどが“わり”。それに裏山で取れた竹の子，というより生えたばかりの笹の芽。思わず「オレ，そういうの大好き」。Ｙ君，翌日も同じおかず。今度は，堂々と「見てくんろ！」

学校から帰ると，ぶっつけ，ビーダマ，べーごま。時々は狭い川をせき止めて“けえどり”。目指すはドジョウ。黄色のあやめが咲く少し豊かな川にはザリガニ。餌のカエルにはお世話になった。採ることが面白く，食べることは考えなかった。

1980年代のニューオーリンズ。フレンチクォーターのシーフッドレストランでのアメリカザリガニ。まあ，美味。

アメリカでの世界地図は，真ん中がアメリカ，右手に近いヨーロッパ，左手にソ連邦。日本はインド，中国，東南アジア等に含まれる“Far East”。ソ連国営の航空会社エアロフロートに簡単な世界地図，やはりソ連が真ん中。クラスの壁中に各国で発行された世界地図が張られていたらどうだったろう。世界を見る目が早く育っていたかもしれない。

50年後の今。上野から約50分。新幹線で熊谷まで36分。補強された小学校は昔のまま。苦手だった鉄棒の懸垂や竹のぼり，その跡が残る。「柴刈り縄ない草鞋を作り，親の手助け弟を世話し兄弟仲良く孝行すれば，手本は二宮金次郎」。その二宮金次郎が刈った柴を背に歩きながら本を読む石像は今も残る。

土手のスカンポジャワさらさ……遠くに思えた荒川堤までは整然としたコンクリートの道路が続く。大きな野球場には少年の声がこだまする。今，Ｙ君は市会議員。すべての豆腐屋は店を閉める。街には空き地が目立つ。ザリガニ釣りをした場所には大型のスーパー。商店街のくじ引きの場所には雑草が生える。利便性の代償として失ったものは大きい。しかし，昔の風景は中学時代の恩師の描く油絵に残る。

(立命館大学大学院教授　千代田邦夫・ちよだくにお**)**

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。